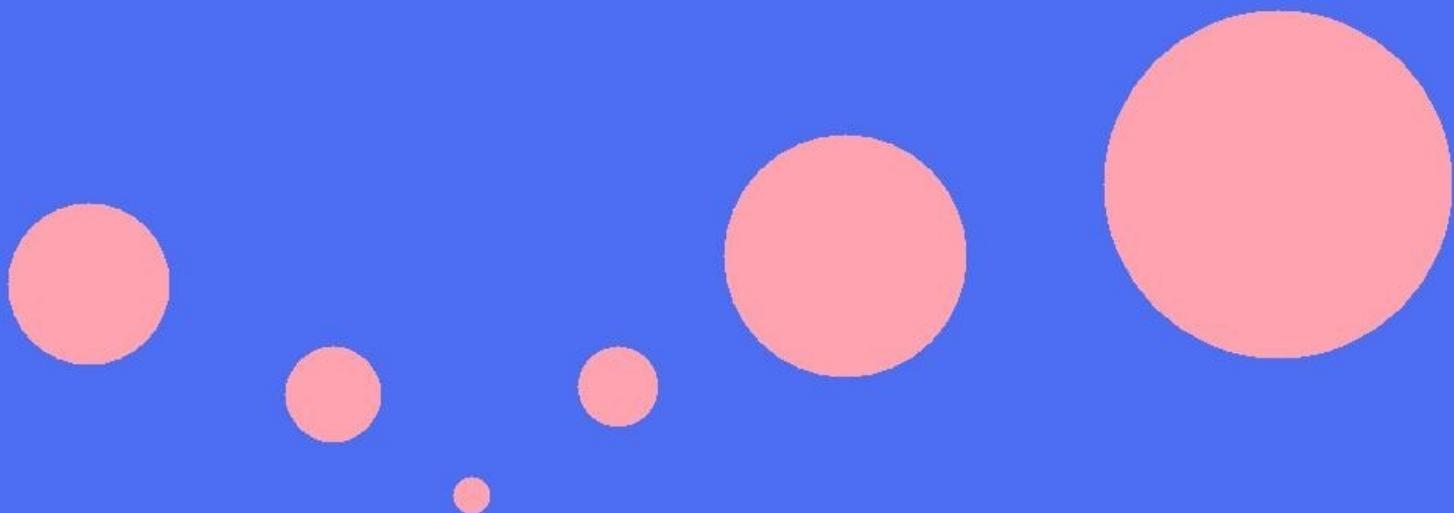


わたしのご主人さま

エッセー



登場人物

トラ吉（1）トラ猫・飼い猫

男（33）ピアノ調律師

おばあさん（61）元教師・トラ吉の飼い主

ジルバ（4）黒猫・野良猫

ナレーター

01猫とおばあさん

<https://www.youtube.com/watch?v=s49ufXB2GQg>

N「トラ猫のトラ吉は、散歩が日課。トラ吉のご主人さまは、猫とピアノが大好きなおばあさん。おばあさんの日課は、ピアノを弾くこと」

SE ピアノのフレーズ。

N「トラ吉は、おばあさんのピアノが大好き。でも、トラ吉が、好きな曲を弾いてと頼んでも、おばあさんには分からない」

トラ吉「ご主人さま、あの曲を弾いてくださいよ。ほら、カタカタ鳴って、思わず、歌い出したくなるあの曲ですよ」

おばあさん「トラ吉、ピアノに乗ってはだめよ。散歩に行きたいなら、扉をあけてあげます。ほら、こっちへいらっしゃい」

トラ吉「ご主人さま、違いますよ。散歩には行きますけどね。ほら、あの曲ですよ」

おばあさん「トラ吉、いつまでピアノに乗っているつもりなの？ ごはんなら、まだですよ」

N「猫には、テレパシーがある。人の心が分かってしまう。けれど、人には分からない。甘えて、すねて、気まぐれで、いつでも人を振りまわす。だけども猫も同じこと。誤解されてはしかられる」

トラ吉「ご主人さまはいい人だけど、どうして勘違いばかりするのでしょうか。仕方ありません。もう少しピアノが聞きたいけれど、散歩に行くことにしますよ」

おばあさん「トラ吉、やっぱり散歩だったのね」

トラ吉「違うのに！」

おばあさん「トラ吉はいつも元気ね。今日は、お客さんが来るの。わたしの教え子よ。いい子だから、早目に帰ってらっしゃい。きっと気に入るわ」

トラ吉「はいはい、早く行くのですから、言われなくても早く帰りますとも」

おばあさん「トラ吉、行ってらっしゃい」

SE 扉が閉まる音。

N「猫には、猫なりの苦勞があって、人にも、人なりの悩みがあって、分からなくてもお互いに気かけあって、同じ家で暮らしている。今日は、ほんの少し、猫たちのテレパシーを感じてみましょう」

SE 散歩を連想させるフレーズ。

02男との出会い

<https://www.youtube.com/watch?v=upqxViVlbsA>

N「トラ吉は、誤解されても、すぐに忘れて元通り。青空よりも晴れやかに、木の葉よりも軽やかに、塀から塀へと飛び移る。トンボを見れば、トンボに変身。夢中になって追いかける」

トラ吉「トンボだ。いいぞ、いいぞ。追いかけて。風になって飛んで行け！」

N「猫が追えば、トンボは逃げる。狙い、狙われ、たどり着くのはいつもの公園。けれど、いつもとは少し違う。男がいた。男は、ピンク色のゴムボールを、壁に投げた」

SE 壁にゴムボールがぶつかる音。

N「ゴムボールは、壁にぶつかり、跳ね返る。トンボが、ゴムボールをよけて、空高く舞い上がる。ゴムボールは、追ってきたトラ吉に命中。地面に落ちた」

トラ吉「ああ、トンボが行っちゃった。おや、こっちにはゴムボール。なんで？」

男「いきなり飛び込んで、危ないトラ猫だなあ。大丈夫？」

トラ吉「あなたこそ、ゴムボールなんか投げて！ 危ないじゃないですか」

N「男は、トラ吉を見守った。トラ吉は、男とピンクのゴムボールを見比べた」

トラ吉「大人が一人で、ボール遊び？ もしやあなた、ゴムボールを盗りましたね？」

N「男は、ゴムボールを拾い上げた。トラ吉は、ゴムボール目がけて飛びついた」

トラ吉「それは、サキちゃんのゴムボール。返しなさい！」

男「このゴムボールが欲しいのか？ それとも俺に遊んで欲しいのか？」

トラ吉「どっちも間違い。勘違い！」

男「ほら、トラ猫。お前にやるよ」

N「男は、ゴムボールを投げた。ゴムボールはコロコロと転がった。トラ吉は、ゴムボールにかみついた。ゴムボールは、ベンチの下に隠された」

男「うまいぞ、トラ猫。しかし、猫も隠すのか。犬みたいだな」

N「男は、ベンチに腰かけた。トラ吉は、男の膝に飛び乗った」

トラ吉「犬の話は忘れてあげます。でもね、あのゴムボールは、サキちゃんの宝物。捨てたわけでも、忘れたわけでもありません。隠してあるんです。学校帰りに、わたしと遊ぶためにね！」

男「初めて会った人間なのに、膝に乗って、ミャアミャア鳴いて、ずいぶん人懐っこい猫だな。遊び足りないのか？」

トラ吉「あなたって人は、ご主人さまよりずいぶんひどい。勘違いも甚だしい」

N「トラ吉は、男の膝から降りた。そして、男の顔を見詰めた。おじさんと呼ぶにはかわいらしくて、お兄さんと呼ぶには憂いに満ちて、あなたと呼ぶほかない顔だった」

男「急におとなしくなって、気まぐれだな」

トラ吉「人というのは、どうして自分を立派だと思いたがるのでしょうか。それでいて、気まぐれに構ったりする。こんな風に」

男「もう一度膝においで。話をしよう」

トラ吉「あなたが話して、わたしが聞いて、反対はない。それを話というなら、いいでしょう。あなた、わたしを心配してくれたから、聞いてあげます。何の話ですか？」

N「トラ吉が、男の膝に乗る。男が、トラ吉の背中に手を置く。しなやかなトラ吉の体を、男の手がなでる。トラ吉も男も、優しい感触に、すっかり気分がよくなった」

03男の悩み

<https://www.youtube.com/watch?v=jL0KLVKEDRM>

男「俺は、ピアノの調律師なんだ。ピアノって分かるか？」

トラ吉「もちろご主人さまが持っています」

男「ピアノは使っている間に弦がさびたり、鍵盤が重くなったり、音が狂ったりして、調律が必要になる。ピアノの調律を専門的にするのが、ピアノ調律師」

トラ吉「へえ～、でもご主人さまのところには、来ませんよ。どうして？」

男「調律は、ピアノを移動させた時、必ずする。移動させなくても、二年に一度はした方がいい。最初は俺も、一軒ずつまわって、誰も弾かなくなったピアノを調律していたんだ。何十年かぶりの調律さ」

トラ吉「ご主人さまは、毎日弾きますよ」

男「毎日弾けば、ピアノの変化に気づく。だけど、いやいや習わされた子どもは、すぐにやめてしまう。何年も忘れられ、さびても気づかない。子どもが生まれて、やっと思い出す。修理か、買い替えか、迷う」

トラ吉「捨てるピアノも調律するのですか？」

男「放置された期間が長いほど、修理は高額になる。どうしようもない時もある。最悪なのは、ネズミの巣になったピアノさ」

トラ吉「ネズミならわたしが獲ってあげます」

男「響きの美しさなんて、欠片もない。鳴らない音さえある。悲しかった」

トラ吉「だから嫌になってボール遊びですか」

男「会社をやめる決心をした日、先生から電話が入った。音楽教師で、小6の担任だった。噂で、俺のことを聞いたそうだ」

トラ吉「学校のピアノを調律したんですか？」

男「自宅に招いてくれた。ピアノを持っていたんだ。学校のピアノは業者が決まっていて、どうしても無理だったの、ごめんなさいって言われたよ」

トラ吉「やさしい先生ですね。わたしのご主人さまにそっくり」

男「それから毎年、先生のピアノだけは、俺が調律している。会うのが楽しみなんだ」

トラ吉「だけど、調律師はやめたんですね」

男「今では、ピアニストから指名がくる。俺なら、どんな場所でも、どんなピアノでも、思い通りの響きが作れる。だから、日本どころか世界中ついでに行く。すごいだろ？」

トラ吉「あなた、続けたんですか？ あんまり寂しそうだから、わたしはてっきりやめたと思いましたよ。でもまあ、夢がかなって、よかったですね」

男「あんなに辛かったのに、あのころが懐かしいよ。毎日、生きている実感があった」

トラ吉「辛かったのに、なんで？」

男「夢がかなったのに、嬉しいはずなのに、目が覚めたらすべて消えてしまいそうで怖いんだ。

可笑しいか？」

トラ吉「可笑しいです。あなたはちゃんと起きています。あなたの夢は、本物です」

男「このトラ猫、俺を心配しているのか？」

トラ吉「そりゃあ心配しますよ。でも、理由のない悩みは言葉にするのが一番です。あなた、気のいい猫と暮らしたらどうです？」

男「こうしてなでていると、気持ちが晴れるよ。でも、そろそろ約束の時間だ」

N「男は、腕時計を見た。トラ吉は、男の膝から飛び降りた」

トラ吉「しまった！ ご主人さまに、早く帰ると約束したんだった」

男「行くのか？ 俺はこっちなんだ」

N「男が歩く。トラ吉も歩く。男が振り返る。トラ吉が立ち止まる」

男「このトラ猫、俺のこと好きなのかな？」

トラ吉「行き先が同じなんです。あなたのことは好きになったけど、今は、ご主人さまとの約束が大切。それじゃ、お先に。また会いましょう」

N「トラ吉が、塀に乗る。男は、塀に添ってトラ吉のあとを追う」

トラ吉「あなた、ついてきちゃだめです！」

男「そこは先生の家だ。入っちゃだめ」

N「トラ吉は、おばあさんの家の庭に飛び込んだ。庭にいたおばあさんは、トラ吉を抱き上げた」

おばあさん「トラ吉、遅いから心配したわ」

トラ吉「人助けをしていたんです！」

おばあさん「声がしたけど、誰かいるの？」

男「先生、お久しぶりです」

おばあさん「まあ、あなたと一緒にだったの」

トラ吉「もしかして、あなたのご主人さまのお客？ ピアノの調律に来たんですか？」

SE 驚きを連想させるフレーズ。

04おばあさんの迷い

<https://www.youtube.com/watch?v=A7mR4yms50U>

N「男は、おばあさんの家に迎えられた。トラ吉は調律を見守った。ピアノは、手際よく解体され、みがかれ、組み立てられた」

SE ピアノのラの音。

男「これでよし」

トラ吉「終わったんですか？ あなた、上手ですね。バラバラになったときは、止めようかと思ったけれど、止めなくてよかった。前よりきれいになった気がします」

N「おばあさんが、やって来た。手には、お盆を持っている。お盆には、紅茶が二つとミルクが一つ載っている」

男「終わりました。試してください」

SE ピアノのフレーズ。

おばあさん「このままで結構です。弾きやすくなりました。さあ、休んでください」

N「トラ吉も、男も、おばあさんも、のどを潤おし、体を休めた」

おばあさん「初めてわたしの家に来たころが、夢のようね。すっかり立派になって」

男「いいえ、まだまだ修行の身です」

トラ吉「あなた、さっきは、どんな場所でも、どんなピアノでも、思い通りの響きができるって言っていたじゃないですか」

おばあさん「あなたは、わたしにずいぶんよくしてくれた。有名なピアニストたちの、専属調律師になった今も、こうしてわたしのピアノをみてる」

男「先生こそ、一番辛い時に、俺に仕事をくれた。先生がいなければ、俺は調律師をやめていました」

トラ吉「そこは、さっきと同じですね」

おばあさん「わたしは調律師を探していたの。このピアノのためにね。でも、今日で最後にしましょう。無理はしないで」

男「無理などしていません。この家に来ることが、俺には何より心地よい。先生、俺の楽しみを奪わないでください」

おばあさん「あなたには、もっと華やかな世界が似合う。何もかもこれからです」

男「俺は、ここが好きです」

トラ吉「ご主人さまも、あなたが好きです。とても楽しみにしていました。なのに、どうして？」

おばあさん「ピアノを、やめようと思うの」

トラ吉「ご主人さま、どうして？」

おばあさん「ごめんなさいね。せっかく調律してもらったのに、やめるなんて言って」

男「誰かが、苦情でも？」

おばあさん「いいえ、誰も、何も」

男「先生、俺には話してください」

トラ吉「そうですよ。ご主人さま」

おばあさん「わたしの好きにさせてほしい」

男「ピアノをやめても、調律は必要です。俺に見させてください。朽ち果てるのを見過ごすことはできません」

おばあさん「小学生だったあなたが、こんなに立派になったのだもの、わたしも年を取るはずね。おばあさんになってしまった」

男「俺もおじさんになりました」

トラ吉「わたしは、年なんて気にしません。どうして人間は、そんなことを気にするのでしょうか。たくさん生きれば、たくさん食べられる。たくさん遊べるのに」

おばあさん「小学校を退職して、わたしはずっとこの家で一人でした。心配した友人が、トラ吉を連れて来てくれました。トラ吉はピアノが好きで、いつも聞いてくれます」

トラ吉「そう、わたしはご主人さまのピアノが大好きです。だから、やめるなんて言わないで」

おばあさん「トラ吉との毎日は楽しい。だけど、ただ練習するだけの毎日は寂しい。子どもたちに囲まれていたところが懐かしい」

トラ吉「それなら、猫を増やしましょう」

男「先生は、新しい暮らしに戸惑っているだけです。すぐに慣れます。先生のピアノを必要とする人に会えます」

おばあさん「そうかしら」

男「ええ、先生ならきっと」

トラ吉「ご主人さま、もちろんです！」

おばあさん「実は、ケアセンターでピアノを弾いて欲しいと頼まれているの。童謡の伴奏をしたり、ピアノを教えたり、小学校と同じと言われたけれど……」

トラ吉「ご主人さま、やったらどうです」

男「先生、迷っているのですか？」

おばあさん「大人は、教え方が難しい。子どもは、日ごとに大きくなっていく。だんだんうまくなる。でも、わたしたちは違います。日ごとに弱くなる」

男「先生は、まだまだお元気です」

トラ吉「そうですよ。あなたより、ご主人さまの方がずっと元気そうです」

おばあさん「繰り返したことは、体が覚えている。でも、新しいことは辛くなってしまった。そのうち、できたこともできなくなる。怖いよ。自分の未来を見るようで、怖くてたまらない。だから、電話してと言われたけれど、どうしても訪ねられない」

N「トラ吉は、おばあさんの膝に乗った。おばあさんは、トラ吉の背に手を置いた。男は、おばあさんの手に自分の手を重ねた」

<https://www.youtube.com/watch?v=UK4jg3Ujoks>

男「先生、覚えていますか？ 今は辛くても、続けてごらんください。きっと新しい夢が見つかります。夢は姿を変えます。何が一番大切なのか、何をしたいのか、思い出してごらん。きっと夢の新しい姿が見えます。自分を信じて」

おばあさん「わたしが、そう言ったの？」

男「初めて、この家に来た日でした」

おばあさん「覚えてない。でも、教師って嫌ね。自分だって迷うのに、立ち止まることを許さず、励ますのだから」

男「素敵なお仕事です。少なくとも、先生は素晴らしい教師でした。俺は、新しい夢を見つけました。失うのが怖いくらいとびきり素敵なお夢です」

おばあさん「わたしも、まだ新しい夢を見つけられるかしら？」

男「きっと見つかります」

トラ吉「ご主人さまなら、絶対に大丈夫。わたしも手伝います」

N「おばあさんは、トラ吉を抱き上げ、男に差し出した」

おばあさん「そうね、やってみなければ分からない。今からケアセンターに行きます。トラ吉を預かってくれないかしら？ 帰りは夜になるかもしれない。缶詰をあげてほしいの」

N「男は、トラ吉を受け取った。トラ吉は、男の腕から飛び降りた」

トラ吉「ご主人さま、わたしなら一人で大丈夫。留守番できます。缶詰なら、今食べます。さあ、お皿に出してください」

男「俺の家に、連れて行きます。だから、ゆっくり見てきてください」

おばあさん「仕事は、いいの？」

男「明後日まで休みです」

おばあさん「あなたが預かってくれるなら安心です。でも、夜まででいいの。戻ったらすぐに迎えに行きます」

トラ吉「わたしよりあなたの意見を聞くのですか。仕方がない。またあなたの話を聞いてあげます。協力しますよ」

N「おばあさんは、ケアセンターに電話をかけた。ケアセンターから、迎えの車がすぐに来た。おばあさんは、男に缶詰を渡した。男は、トラ吉を抱き上げた。おばあさんを見送り、男とトラ吉は歩き出した」

SE 移動を連想させるフレーズ。

<https://www.youtube.com/watch?v=B0fugfHxNaU>

N「トラ吉は、男の腕に抱かれ、赤く染まる街を見た。東の空には闇が迫り、夜の訪れを告げていた。男の腕に抱かれて見る景色は、夢のように美しかった」

トラ吉「きれいな夕焼けです。ご主人さまにも見せてあげたかった」

男「俺と先生の家は、2キロしか離れていない。すぐ近くなのに、先生の家に来られるのは一年に一度。調律の時だけ。仕事が忙しくて、ほとんど家にいないんだ」

トラ吉「ご主人さまの家に来るお客は、みんなそうです。腕時計や携帯電話で動く。音が鳴るたびにアレコレするなんて、わたしは猫に生まれて幸せです」

男「ほら、あそこに神社が見えるだろ？ 神社の角を曲がれば、俺の家が見える」

トラ吉「へえ～、神社があるんですか」

N「トラ吉は、神社を見た。神社には、黒猫がいた。黒猫は、トラ吉に近づいた」

ジルバ「まあ、かわいい子猫ちゃん。人に抱かれ、歩くことすら知らないのね」

トラ吉「わたしだって、いつもは歩きます。今日は、ご主人さまのためにこの人の世話をしているんです」

ジルバ「どちらでも同じこと。猫も、人に飼われてはお仕舞いよ」

トラ吉「なんですって！」

N「黒猫は、神社の奥に去った。トラ吉は、男の腕の中で、もがいた。驚いた男は、トラ吉をしっかり抱きかかえた」

トラ吉「離してください。あんなこと言われて、黙ってられません」

男「トラ吉、暴れちゃだめだ。もうすぐ暗くなる。迷子になっては、先生が悲しむ。俺のそばにいてくれ」

N「トラ吉は、神社の奥をのぞいた。黒猫の姿は、すっかり消えていた」

トラ吉「仕方ありません。あの黒猫のことは忘れます。ご主人さまのためです」

男「さあ、急ごう。お腹が減っただろう？」

トラ吉「あなた、よく分かりましたね。もう待ちくたびれちゃいましたよ」

SE 移動を連想させるフレーズ。

<https://www.youtube.com/watch?v=etkWo5o7hQg>

N「トラ吉は、男の家に着いた。男の家は、レンガ造りの洋館だった。古びた洋館の門の向こうに、小さな庭が見えた。庭には、ゴミ袋が並んでいた。ゴミ袋の中には、空き缶や空きびんが詰まっていた」

トラ吉「ここがあなたの家ですか。ずいぶん寂しいところですね」

男「ここは、両親が残した家だ。俺は、この家にひとりで住んでいる。今ではほとんど荷物置き場さ」

N「トラ吉は、門をくぐり、庭を通り抜け、玄関に入った。玄関は、長い廊下につながっていた。廊下の先には、扉があった」

SE 扉を開く音。

N「広い部屋には、ベッドとソファとテーブルが置かれていた。テーブルの上に、ガラスのびんが並んでいた。トラ吉は、テーブルに飛び乗った」

トラ吉「庭にも、テーブルにも、ガラスのびんがある。こんなに集めて、いったい何に使うのですか？」

男「トラ吉、テーブルはだめだ。ガラスが割れると危ない」

N「男は、トラ吉をつかまえた。トラ吉は、ソファに下ろされた」

男「トラ吉は、この部屋にいてくれ。俺は、皿を取ってくる」

トラ吉「いいですよ。この部屋を見させてもらいますから」

N「男が、部屋を出る。トラ吉が、ソファから降りる。床には、カーペットが敷かれている。

トラ吉は、歩きまわり、カーペットの感触を楽しんだ」

トラ吉「なかなか気持ちのいいカーペットですね。今度はベッドに乗ってみましょう」

N「トラ吉は、ベッドに飛び乗った。ベッドには、布団と枕があった。トラ吉は、枕に飛び乗った。枕が沈み、トラ吉は優しく包まれた。トラ吉は、枕が好きになった」

トラ吉「この枕、わたしのベッドにピッタリです。なんて気持ちがいいのでしょうか」

N「男が、入ってきた。手には、皿とボールを持っている」

トラ吉「お皿の中は、缶詰ですね。ここで食べますから、持ってきてください」

男「トラ吉、ご飯だよ。おいで」

N「男は、缶詰の入った皿を、床に置いた。トラ吉は、枕に寝そべり、皿を眺めた」

トラ吉「わたしは、この枕から離れたくありません。どうして、床に置くのですか？」

男「トラ吉、ベッドで寝るのは、食べ終わってからにしよう。さあ、おいで」

トラ吉「仕方ありません。お客に呼ばれたのですから、あなたのやり方に合わせます」

N「トラ吉は、枕から下りて、お皿の前に座った。男は、水の入ったボールを皿の隣に置いた。

トラ吉は、水を飲み、缶詰を食べ出した」

男「トラ吉、うまいか？」

トラ吉「いつもと同じ味です。気に入ってはいますけどね。あなたは、何を食べるんですか？」

N「男は、テーブルの上のびんを取った。びんには、お酒が入っていた。男は、ソファに座って、お酒を飲み始めた」

トラ吉「変わった匂いのする水ですね。ご主人さまの家では、見たことはありません」

男「トラ吉も俺も、毎日同じ味。好きなものは、何度味わっても飽きない」

トラ吉「わたしは、缶詰以外にも食べますよ。食べるのが好きなんです」

男「食べ終わったら、トラ吉は何がしたい？」

トラ吉「わたしのことなら、心配いりません。枕で寝ます」

男「この家にゴムボールはないし、何して遊ぼうか？」

トラ吉「あなたが遊びたいのですか。分かりました。食べ終わったら、付き合います」

N「食べ終わると、トラ吉は男を見た」

男「俺と遊ぶか？」

トラ吉「ええ、相手になりますよ」

N「男は、ポケットからハンカチを出した。トラ吉は、男の足元に座り、ハンカチを見上げた。男が、トラ吉の前でハンカチを振る。トラ吉が、ハンカチに手を伸ばす。男が、ハンカチを引き上げる。トラ吉の手が、空を切る」

トラ吉「あなた、ずるいじゃないですか。わたしに貸してくださいよ」

男「トラ吉、今度は取ってごらん」

N「男が、ハンカチを振る。トラ吉が、ハンカチに飛びつく。男が、ハンカチから手を離す。ハンカチが、トラ吉の顔を覆う。トラ吉が、床を転がり、テーブルの脚にぶつかる。男は、トラ吉を抱き上げた」

男「トラ吉、平気か？」

トラ吉「わたしなら、平気です。これくらいは、いつものことです。それより、このハンカチは、もうわたしのものです。返しませんからね」

N「トラ吉は、ハンカチをくわえて、枕の上で丸くなった。男は、トラ吉の隣に横たわった」

男「トラ吉とは、今日会ったばかりなのに、ずっと暮らしているような気がする」

トラ吉「わたしも同じ気持ちです。不思議ですね。でも、わたしのご主人さまはひとりです。迎えに来てくれるはずなのに、ずいぶん遅いですね」

男「このまま迎えが来なければいいのに」

トラ吉「あなたが追い返しちゃったんですか。なんてことを！」

N「トラ吉は、枕から下りて、出口を探した。けれど、扉も窓も閉まっていた」

男「トラ吉、トイレなら、庭ですか？」

N「男が、窓を開ける。トラ吉が、窓から飛び出す」

トラ吉「ご主人さま、待っていてください」

男「トラ吉、戻れ。行っちゃだめだ！」

N「トラ吉は、庭を通り抜け、門を飛び越え、男と来た道を、ひとりで走った。道は、真っ暗だった」

SE 疾走をイメージするフレーズ。

08 ジルバとの再会

<https://www.youtube.com/watch?v=xbalQxmsvVI>

N「トラ吉は、おばあさんの家に着いた。おばあさんの家は、真っ暗だった。真っ暗な庭を、トラ吉は歩いた」

トラ吉「ご主人さまは、どこへ行ってしまったのでしょうか。追い返されて、ひとりでケアセンターに？ いいえ、迎えに来てくれる。きっとわたしに会いに来る。もう来ているかもしれない。戻らなくちゃ！」

N「トラ吉は、男の家に戻った。家には、明かりが灯っていた」

トラ吉「ご主人さま、やっぱりわたしを迎えに来てくれたんですね」

N「トラ吉は、逃げだした窓から、部屋に飛び込んだ。部屋は、出て行った時のままだった。けれども、男の姿だけはなかった」

トラ吉「誰もいない。人の気配がしない。ご主人さまどころが、追い返したあの人までいなくなるなんて、どうして？」

N「トラ吉は、窓から庭に飛び出した。月も星もない夜空は暗く、街は静まり返っていた。ただ、神社の木々だけが、ザワザワと揺らいで、不気味な音を立てていた」

トラ吉「ご主人さま、どこにいるんですか。わたしは、ここです。ここにいます」

ジルバの声「うるさい子猫ね」

トラ吉「誰？ 姿を見せて」

N「トラ吉は、暗闇を見た。闇の中に、黄金色の光が二つ見えた。光は、どんどんトラ吉に近づいた。光が止まり、闇の中に、黒猫の姿が浮かびあがった」

トラ吉「あなたは、神社で見た黒猫！」

ジルバ「わたしはジルバ。色が同じというだけで、全部まとめて黒猫だなんて失礼よ。ジルバさんと言いなさい」

トラ吉「わたしはトラ吉です」

ジルバ「トラ猫の名前が、トラ吉ですって。柄も名前も、違いがない。その上、人間が頼りのつまらない飼い猫。さっさと家に帰りなさい」

トラ吉「ジルバさん、待ってください」

ジルバ「わたしは、静かな夜が好きなの。そんなにわめかれては、迷惑です」

トラ吉「神社の前を、おばあさんが通りませんでしたか？ わたしのご主人さまです」

ジルバ「男なら見た」

トラ吉「わたしを抱いていた？」

ジルバ「あの男、神社へ来るなり、トラ吉と呼び続けて、うるさいったらない。その上、携帯電話まで鳴り出す始末。先生がどうか、さんざん話して、去って行った」

トラ吉「先生？ きっとわたしのご主人さまのことです。ご主人さまに、何かあったのですか？ 教えてください」

ジルバ「このわたしが、人間の事なんか、知るはずがない。あなたも、早く人間から離れなさい」

トラ吉「ジルバさん、行かないで！」

N「ジルバは、現れた闇に、再び溶け込んだ。トラ吉は、ジルバを追った」

SE 緊張を連想させるフレーズ。

<https://www.youtube.com/watch?v=CMAAsEMgicyc>

N「トラ吉は、ジルバを追って神社に着いた。ジルバは、立ち止まり、トラ吉を見た」

ジルバ「最初の威勢はどうした？ やっぱり、人間がいなくては、何もできない」

トラ吉「ジルバさん、お願いします。教えてください。わたしはどこへ行けばいいのでしょうか。ご主人さまは、どこへ行ってしまったのでしょうか」

ジルバ「哀れな飼い猫。何から何まで、人間に任せっきり。食べ物どころか、水さえ人からもらう。いつまでたっても子猫。何も知らない。何もできない」

トラ吉「ジルバさんの言う通り。ご主人さまと離れてしまうなんて、思ってもみませんでした。いつでもあの家にいてくれる。そう信じて、疑わなかった」

ジルバ「野良猫には、2種類いる。一つは、自由を愛し、野良猫として生きることを、自ら選んだわたしのような猫。もう一つは、人間から見放された猫。今のあなたは、いずれは彼らの仲間」

トラ吉「わたしは、どうしたらいいのでしょうか」

ジルバ「人間のことは忘れなさい。そして、ひとりで生きなさい」

トラ吉「でも、ご主人さまにはわたしがが必要です。帰らなければ、悲しみます。話し相手がいなくなる」

ジルバ「世話を必要とするものがいなくなれば、人間は自由になれる。悲しむとは限らない」

トラ吉「でも、昨日会ったあの人だって、わたしと遊んで、一緒に休んで、とても喜んでくれました。困ったことをされたけど、わたしも嬉しかった。教えてください。電話で、何を話していたのですか？」

ジルバ「知らない。知っていても教えない」

トラ吉「なぜ？ わたしが、嫌いだから？」

ジルバ「いずれ困ると分かっているのに、事実には背を向け、目をそらす。自分で招いた結末なら、受け入れなさい。どうなろうと知らない」

トラ吉「ジルバさんは、飼い猫が嫌いなんですね。飼い猫は、人間がいなければ何もできない。でも、野良猫は違う」

ジルバ「そうよ。嫌い。分かったら、さっさと行きなさい」

トラ吉「でも、将来困らないために、大切な人から離れるなんて、わたしにはできません。もう一度会いたい」

ジルバ「今さえよければいいというの？」

トラ吉「大切な人を失うより、怖いものなどありません」

ジルバ「いつかきっと後悔する」

トラ吉「ご主人さまに会うことをあきらめたなら、いつかではなく、今、後悔します」

N「ジルバは、トラ吉を見た。トラ吉は、ジルバを見返した。黄金色のジルバの瞳に、自信に満

ちたトラ吉が映った」

ジルバ「あなたの主人とあの男は、一緒に暮らしているの？」

トラ吉「いいえ、違います。一年に一度、訪ねてくるだけです」

ジルバ「大切なのは、自分の気持ちに正直でいること。心から、一緒にいたいと思える相手と生きなさい。飼い猫は、一生を主人に捧げるのだから」

トラ吉「もちろんです。わたしは、ご主人さまが大好きです。一緒にいたい」

ジルバ「あの男は？」

トラ吉「あの人ですか？ 困った人だけど、好きになりました。一緒にいてあげたい」

ジルバ「では、選びなさい。誰と暮らすのか、自分で決めなさい」

トラ吉「わたしが、選ぶ？」

ジルバ「人間と生きれば、人間の都合に振りまわされる。選ぶ覚悟をしておきなさい」

トラ吉「確かに、わたしは人間に振りまわされてばかり。ご主人さまもあの人も、全然分かってくれない。でも、わたしは人が好きです。振りまわされたって構わない」

ジルバ「今は、分からなくてもいい。でも、覚えておきなさい。これは忠告」

トラ吉「ジルバさんが、そう言うなら」

ジルバ「もう一度あなたの主人の家に行きなさい。もし、誰にも会えない時は、ここに戻ってきなさい。わたしも、探す」

トラ吉「ジルバさん、ありがとう」

ジルバ「ジルバでいい。飼い猫は嫌いだけど、トラ吉だけは特別。心意気が気に入った」

トラ吉「わたしも、ジルバが好きです」

ジルバ「さあ、早く行きなさい」

N「ジルバは、トラ吉に背を向けた。トラ吉は、ジルバを見送った。ジルバの前には、闇が広がっていた。ジルバは、闇に去った」

トラ吉「わたしは人の手で、ご主人さまの元へ連れてこられた。だけど今、自分の足で帰っていく。野良猫になるより、飼い猫のままでいることを選ぶ。ご主人さま、待っていてください」

SE 行進を連想させるフレーズ。

10男との再会

https://www.youtube.com/watch?v=6EAkA2Z6R_Y

N「トラ吉は、おばあさんの家に着いた」

トラ吉「あの人がいる。何か話している」

男の声「冷静になって考えよう。歩きまわっても見つからない。俺の家は窓が開いている。トラ吉が戻っても、中に入れる。だけど先生の家には入れない。やっぱりここで待とう。ここはトラ吉の家だ」

トラ吉「わたしなら、ここにいます」

男の声「猫が鳴いた。トラ吉なのか？ 姿を見せてくれ」

N「トラ吉が、男にかけよる。男は、トラ吉を抱き上げた」

男「トラ吉、けがはないか？ 怖い目に遭わなかったか？」

トラ吉「わたしなら大丈夫。あなたこそ、ずいぶん疲れていますね。少し休んだらどうですか？」

男「俺に慣れたとばかり思っていたのに、急に飛び出すから驚いたよ。ここに来たってことは、飼い主が恋しくなったのか？」

トラ吉「違います。ご主人さまがどうしているのか、心配だったんです。あなたが、追い返してしまっただけから」

男「先生は、ケアセンターに泊まるそうだ」

トラ吉「やっぱり、ひとりが寂しかったのですね。かわいそうに」

男「ちょうど誕生会があって、招待されたそうだよ。ピアノを披露したって、嬉しそうに話してくれた」

トラ吉「では、あなたが追い返したわけではないんですね？ ああ、よかった」

男「トラ吉のこと、心配していた。ゆっくりしてくればいいのに、朝一番で送ってもらうさだよ」

トラ吉「そういうことなら、ご主人さまも、ゆっくりしてくればいいのに。わたしなら、この人と待てます」

男「トラ吉は、ずいぶんかわいがられているんだな」

トラ吉「あなたこそ、ずいぶんご主人さまに信頼されているんですね。ご主人さまが、わたしを預けて泊まるなんて初めてです」

男「先生が戻る前に、見つかってよかった。見つからないままでは、きっとケアセンターに行ったことを後悔したろうから」

トラ吉「ずっと探していたんですよ。いったい、あなたはどこにいたんです？」

男「最初は、庭で、黒猫に会ったのかと思った。だから神社まで、探しに行った」

トラ吉「黒猫なんて呼ぶと、ジルバが怒りますよ。一匹ずつ違うって。最初は嫌な猫だと思ったけれど、今は好きです」

男「トラ吉を神社で探していたら、先生から泊まるという電話が入った」

トラ吉「ジルバから聞いた通りですね。それから、あなたはここへ来たんですか？」

男「俺は、先生の家、俺の家、公園と見てまわった。だけど、トラ吉はどこにもいなかった」

トラ吉「わたしは、神社にいましたからね。それで？」

男「もう駄目だと思った。でも、ここで待っていてよかった。来ると信じていた」

トラ吉「あなたも、ずいぶん探しまわったんですね。家にいてくれればよかったのに。でも、あなたが家にいたら、ジルバとは会わなかった」

男「トラ吉が先生の家に行きたいなら、もう俺の家に行かなくていい。ここで待とう」

トラ吉「窓は閉まっています。あなた、ご主人さまの家に、入れるのですか？」

男「家の中には入れないけど、トラ吉と一緒になら、一晩くらい外でも平気さ」

N「男は、玄関に腰を下ろした。トラ吉は、男の膝で丸くなった。男は、トラ吉の背に手を置き、なでた」

トラ吉「こうしてあなたに背中をなでられていると、暖かくて、眠くなります」

男「トラ吉、疲れただろう。眠ってもいいぞ。俺が見ている」

トラ吉「いいえ、わたしだっのご主人さまを待ちます。朝まで、起きていられます」

N「男は、トラ吉を見た。トラ吉のまぶたは、ゆっくり閉じた。トラ吉は、寝息を立て始めた」

SE 睡眠を連想させるフレーズ。

11新しい関係

<https://www.youtube.com/watch?v=rbJd47GE9bc>

N「トラ吉は、男の膝で朝を迎えた。男は、眠らず起きていた」

トラ吉「しまった！ 寝てしまうなんて、起こしてくれればよかったのに」

男「トラ吉、起きたのか。公園に行こう」

トラ吉「公園？ あなた遊ぶつもりですか」

男「先生に、余計な心配はさせたくない。トラ吉は俺の家で眠って、俺が送ってきた」

トラ吉「嘘をつくんですか？」

男「トラ吉は、こうして帰ってきたのだから、知らせなくてもいいだろう？」

トラ吉「ご主人さまなら教えてもいいのに」

男「トラ吉がいなくなると、寂しくなる」

トラ吉「わたしには、ご主人さまがいます。寂しくありません。でも、あなたは、広い家にひとりでしたね」

N「トラ吉は、男に抱かれたまま公園に着いた。男は、ベンチに座った。トラ吉は、男の腕から下りた。男は、トラ吉を抱き上げ、ベンチに置いた」

トラ吉「せっかく公園に来たのだから、ゴムボールで遊びましょう。サキちゃんも、あなたになら貸してくれるでしょう」

男「トラ吉、俺の隣にいてくれ」

トラ吉「どうしてですか？ あなた、ゴムボールが好きなのでしょう？」

男「俺のそばにいて欲しいんだ」

トラ吉「あなたがそう言うなら、いいですよ。ゴムボールは、今度貸してあげます」

N「男の携帯電話が鳴った」

トラ吉「きっとご主人さまからです」

N「男は、電話に出た」

男「いいえ、わたしが行きます。もう近くまで来ています。家で待っていてください」

N「男は、電話を切った」

トラ吉「ご主人さまが帰ってきた」

男「トラ吉は、先生の猫だ。だけど、俺は、トラ吉をかえしたくない」

トラ吉「あなた、行かないつもりですか！」

男「だけど、あちこち連れまわすのはかわいそうだ。第一、トラ吉は先生から離れない。昨日だって、帰ってしまったのだから」

トラ吉「あなた、そんなにわたしといたいのですか？ そんなに寂しいのですか？」

男「そろそろ時間だ。トラ吉、行こう」

トラ吉「わたしなら、もう少しここにいてもいいですよ」

男「別れるなら、早い方がいい。その方が、悲しくない」

N「男は、トラ吉を抱いて歩きだした。トラ吉は、男の顔を見上げた。男の瞳には、明るくなった空が映っていた。空は、晴れ渡り、雲ひとつない。小鳥も、太陽も、月もなく、青い日差しだけが広がっていた」

トラ吉「ジルバは、こうなると知っていた。わたしは、どうしたいのでしょうか。自分のことなのに、分からない」

男「トラ吉、庭で先生が、手を振っている」

トラ吉「そうだ、ご主人さまならなんとかしてくれる。ご主人さま！」

N「トラ吉は、男の腕から飛び出し、おばあさんに飛びついた」

トラ吉「ご主人さま、聞いてください！」

おばあさん「トラ吉はいつも元気ね」

男の声「先生、おかえりなさい」

N「男が、門を抜け、庭に入ってきた」

おばあさん「あなたには、本当にお世話になりました」

男「いいえ、俺はトラ吉と過ごせて、すごく楽しかったです」

トラ吉「わたしも楽しかった。ご主人さま、このまま3人で暮らしましょう」

おばあさん「あなたに励まされて、思い切って行ってよかった」

男「ケアセンターで、教えることに決めたのですか」

トラ吉「ご主人さま、お願いします。今は、ケアセンターよりこの人のことを考えてください」

おばあさん「ピアノを教えた後、いろいろな人の生徒になりました。歌や絵を習いました。わたしは、難しく考えすぎていたのかもしれませんが。声を出すだけで、筆を持つだけで、楽しいのです。きっとみんなも同じです。ピアノに触れるだけで、新鮮な気持ちになれる」

男「来年の今ごろ、調律に来ます。ピアノは、続けられるのでしょうか？」

トラ吉「あなた、わたしといたいなら、ピアノよりわたしの話をしてください」

おばあさん「やめるなんて、だだっこのようでした。年をとると子どもにかえるというけれど、本当かもしれない」

男「ケアセンターには、トラ吉も連れて行くのですか？」

トラ吉「そうだ、あなたもケアセンターに来るといのはどうです？」

おばあさん「ええ、週に2回、トラ吉と一緒に通うつもりです」

男「トラ吉、一緒に行けてよかったな」

N「男が、トラ吉に背を向けた」

トラ吉「待って、ここに残って」

おばあさん「あなた、行ってしまうの？」

男「トラ吉は、届けました。先生お元気で」

トラ吉「だめです。あなたを行かせるわけにはいきません。もし、どうしても行くというなら、わたしも行きます」

N「トラ吉は、男に飛びついた。男は、トラ吉を抱き上げた」

おばあさん「トラ吉、どうしたの？ あなたの家はここでしょう？」

男「トラ吉、あんなに会いたがっていたのに、どうした？」

トラ吉「わたしは、あなたと行きます。あなたと暮らしたい」

おばあさん「トラ吉、こちらへいらっしゃい。お腹が空いたでしょう。缶詰をあげます」

トラ吉「缶詰は好きだけど、この人はもっと好きです。わたしは戻りません」

男「トラ吉、食べておいで」

トラ吉「あなたがあきらめても、わたしはあきらめません。一緒に暮らすためには、わたしが行くしかないのです」

おばあさん「トラ吉は、決めてしまったのね。寂しいけれど、仕方がない」

男「先生まで、どうしたのですか？」

トラ吉「ご主人さまは、分かってくれるのですね。行ってもいいんですね」

おばあさん「あなたがトラ吉といたいなら、遠慮は要りません。連れて行きなさい」

男「先生、本当にいいのですか？」

おばあさん「トラ吉が決めたのです。気持ちよく送り出してあげたい」

男「俺は、旅ばかりです」

トラ吉「だから、あなたについていくのです。どこにいても、わたしがあなたの家になってあげます」

おばあさん「猫には、人間にはない不思議な力がある。トラ吉は、事情を知った上で、あなたについていくのかもしれませんが」

トラ吉「ご主人さま、その通り」

男「トラ吉、俺と来てくれるのか？」

トラ吉「わたしは、あなたと行きます」

おばあさん「これで決まり。トラ吉の荷物は、まとめておきます。今は2人ともこのまま行ってほしい。見送りはしません」

男「先生、ありがとう。大切にします」

おばあさん「最初から気が合っていたもの、あなたたちなら、きつとうまくいきます」

トラ吉「ご主人さま、また遊びに来ます」

N「おばあさんは、家の中に去った。男は、立ち止まり、おばあさんの家を見上げた」

男「先生、ひとりで大丈夫かな？」

トラ吉「大丈夫、あなたより元気です」

N「突然、ピアノの音が聞こえた」

M 「ピアノの曲」が流れ出す。

トラ吉「これは、わたしが大好きな曲。ご主人さま、知っていたんですね。ご主人さま、ご主人さま、ご主人さま」

男「トラ吉、やっぱり戻りたいのか？」

トラ吉「いいえ、あなたと行きます。あなたは、わたしの新しい家族です。でも今は、今だけは、呼ばずにはられない」

N「トラ吉は、男の腕から飛び出し、走り出した。男は、トラ吉を追った。トラ吉は、鳴きな

がら、男の家に走り続けた」

M 「ピアノの曲」が遠ざかる。

12わたしのご主人さま

<https://www.youtube.com/watch?v=bXgftwSMrgQ>

N「トラ吉は、男の家に着いた。男は追いつき、トラ吉をつかまえた」

男「追いかけては終わりだ。少し休もう」

トラ吉「ここがわたしの家。いいですよ」

N「男は、トラ吉をベッドに置いた。トラ吉は、枕に丸くなった。男は、トラ吉の隣に横たわった。トラ吉の瞳に、男が映った」

男「トラ吉、いつまでも俺といてくれ」

トラ吉「もちろん。わたしのご主人さま」

13エンディングテーマ

<https://www.youtube.com/watch?v=33MMviysU7U>

おしまい